



恋はダウンヒル



来間タロー

再会

24歳のサラリーマン 寺井早人は、
子供の頃から自転車が好きで、
大人になっても、趣味で自転車レースに出場している。

寺井は、昨日も自転車レースに出場したのだが、
レース中に他の選手と接触、落車した。

すぐに起き上がろうとしたのだが、
落車した際に強打した左肩が痛く、
レースは続行不可能で失格となった。

翌日寺井は、会社を休んで自宅近くの整形外科を訪れた。
時間は、午前の受付が終了する時間であり、
受付の女性は寺井の目の前で [午前の受付は終了しました]
というカードを立てた。

『あ、あの、すみません。
なんとか、午前で診て頂けないでしょうか？』
『あ～、予約は、されてますか？』

『いえ、初診ですが、なんとか お願いします。』
『どうされましたか？』

『昨日、自転車から落車しまして、今もすごく痛いんです。』
『はい、判りました。保険証を出して下さい。』

女性は、そう言うと 少し迷惑そうに
受付終了のカードを引っ込めた。

『あ、はい。助かります。』

寺井が保険証と問診票を受付に提出すると、
今までずっと、下を向いて対応していた女性が、
はっと寺井を見上げた。

『あの、何か？』

『もしかして、寺井君？』

嬉しいのか、迷惑なのか判らない位 微妙な笑顔で
受付の女性は尋ねた。

『え、そうですが。僕を ご存知なんですか？』

『あ～、覚えてないか？ いいです。すみませんでした。
あちらで、お名前をお呼びするまでお待ちください。』

受付の女性は、残念そうな表情で そう言うと、
再び午前受付終了のカードを立てた。

寺井は、疑問を残しながら、自分の番を待つ事にした。
『誰だったかな？ 思い出せねえ。』

午前の部寺井は最終患者で、患者は段々と減って行き、
レントゲン写真を撮り終えて 待合室に戻ると、
寺井一人だけになっていた。

また、もうすぐ昼休みということで、受付の女性は
もう一人の受付女性と何やら私語をしているようだった。

人がほとんどいない待合室には、
そのヒソヒソ話が途切れ途切れに、
寺井の耳に聞こえてきた。

『本当に覚えてないのかな？』

『多分ね。何しろ9年前だから……』

『……で、……なの？』

『うん、中学3年の時、同じクラスで……』

スポーツ新聞で顔を隠しながら、
チラチラと横目で受付を見て、
聴く耳を立てていた寺井は、やっと思い出した。

(あ、そうか、櫻村か。お～、懐かしい。)

『寺井さん、どうぞ。』

診察室から呼ばれた寺井は、立ち上がり、
受付の方に小声でこう言った。

『思い出したよ、榎村さん。』

受付の榎村は、無言の笑顔でVサインを出した。

(あのVサイン、9年ぶりか。)

寺井は、怪しい半笑いで診察室に入った。
そこには、寺井の問診票を読む医師が待っていた。

『え〜と、自転車レースでクラッシュされたんですね？』

『はい。』

『自転車がクラッシュで、骨もクラッシュしたかも。』

『は？』

ジョーク好きの医師は、
上半身の服を脱いだ寺井の診察を始めた。
そして、痛めた個所を触りながら、

『ココ、痛いでしょ。』

『い、痛いです。』

『ココ、こうすると もっと痛いでしょ。』

『痛ててて、先生、痛いですって。』

『レントゲン写真を見てください。
鎖骨にヒビが入っています。』

『本当だ。クラッシュしてなくて良かったです。』

『今日はギプスで固めときます。しばらくは、安静に。』

『はい、ありがとうございます。』

診察後、待合室には寺井と受付の樫村しかいなかった。
そして、寺井が、受付で診療費を払おうとした。

『初診料、レントゲンとギプス、
お薬が出てますので、7万8千円になります。』
『ななまん？』

『あ、ゴメン。1桁読み違えた。7,800円です。』
樫村は、満足そうな笑顔で寺井をからかった。

一万円札を差し出しながら、寺井は呆れ顔でこう言った。
『お前、その性格の悪さ、まったく変わってないな。』
『あははは。』

樫村の笑い声が収まると、
他に誰もいない待合室は沈黙になった。
そして、二人は言葉も無く、目線を反らしながら、
互いに 何かを待っているようだった。

しばらくして寺井は、決意を固めて樫村に話しかけた。

『お、おつり 早く くれよ。2,200円。』
『あっ、おつり、おつりね。いるの？』

『あたりまえだ。おつり、よこせ。』
『はい、お大事に。』

そう言って差し出された、おつりの入ったトレイ。
これを受け取ると、寺井と樫村の再会は、終わる。
しかし、寺井は再会をここで終わらせたくなかった。

『あのさ、今から、昼休みだろ？
良かったら、メシでも一緒にどうだい？』
『う～ん、どうしようかな？』

返事を既に決めているはずの樫村は、
寺井の顔を伺いながら じらしていた。

そして、寺井が少し不安な表情になったのを見計らってから、返事をした。

『御馳走してくれるなら、いいわよ。』

『む、じゃ 二人で2,200円以内だぞ。』

『オッケー。じゃ、表でちょっと待ってて。』

9年前、中学3年生の時クラスメイトだった二人は、お互いに 大人になって 再び出逢った。

記憶というアルバム

9年ぶりに再会した寺井と榎村は、
榎村が勤める病院近くのお好み焼屋でランチタイム。
二人の会話は、まず中学校時代の思い出話から始まった。

『中学校での 一番の思い出って何？』

『う〜ん。部活かな。』

『やっぱり、アンタ陸上部で毎日走ってたもんね。』

『うん。走った思い出しかないよ。榎村は？』

『私も部活かな。』

『バスケ部だったよな。確か。』

『よく知ってるわね。』

実は、こっそり体育館に覗きに来てたんじゃない？』

『覗くかっ！ ずっと、グラウンドを走ってたって、』

お前も さっきそう言っただろ。』

『中学の頃、よくこんな 馬鹿な話してたよね。』

『そうだったな。俺達って全然成長してないんだな。』

二人は、共に子供だった9年前を思い出し、
懐かしさに浸っていた。

しかし、目の前には、お互いすっかり変わってしまった
大人の姿があった。

『中学卒業後の進路は、どうだった？』

『高校でも、バスケ部で部活一筋に頑張ってたかな。』

高校卒業後は、短大に進みたかったけど、

家計の都合で断念して、

それから今までずっと整形外科で受付をしているの。

寺井は？』

『高校では、部活に入らず、ひたすら勉強してたな。』

『本当？また、カッコつけて。』

『本当だって。入りたい大学があつてな。
そこへ進学する為だよ。
そこは、自転車競技部があつて、結構強いんだ。』
『あ～、アンタ自転車 好きだったよね。』

『でも結局、不合格で そこへは進めなかった。』
『残念だったね。夢は叶う方が少ないし仕方ないよ。』

櫻村は、本当に残念そうに寺井を宥めた。
他人事では無く、自分のパートナーを大事にするように。

『お前って結構、優しいんだな。意外というか…』
『ちょっと、何言ってるのよ！
アンタが、しみりと話すからでしょ。
それより早く、続きを話してよ。』

『あ、で、とりあえず理系の大学を卒業して、
今の電気メーカーに就職した。
自転車は、趣味として続けているよ。
たまにロードレースにも出たりしてるんだけど……』

『アンタ、どんくさいから、
レースでクラッシュ、鎖骨もクラッシュ……』
『やかましい！』

二人は、中学卒業後から現在までの事を
相手の思い出話を聞く事で、
まるで、相手のアルバムをめくるように、
お互いに連想していた。

そして、ミックスモダン焼き大と食後のコーヒーで、
きっちり 一人1,100円で収めた二人は
お好み焼き屋を出た。

『あー、おなか一杯。御馳走様！』

満面の笑顔で、櫻村は礼を言うと。

『あ、いや。ところで、あのさ……』

『もうすぐ、昼休み終わるから、もう帰らないと……』

急いでいるようだが、待っているようにも見える
そんな仕草で櫛村は答えた。

『こ、今度二人で 会ってくれないか？』

『うん。OKだよ。』

寺井は、少年のような笑顔で喜んだ。

『もう、時間だから行くわね。』

そう言いながら、櫛村は寺井の左手に付けたギプスに
自分のメールアドレスを書いて、去って行った。

異性としての魅力

満腹の昼食を終えた榎村は、少し遅刻して受付に戻ると後輩の受付嬢からやっかみの入った歓迎を受けていた。

『榎村先輩、お帰ります。』

『どうでしたか？ロードレーサーとの昼食は？』

『ああ、ま、あんなモンね。』

『どんな話をされたんですか？』

『中学の思い出が、ほとんどだったかな？』

『絶対、嘘だ。』

『何で、そう良い切れるのよ？』

『大人になって再会した男女が、』

『そんな事に興味あるわけ無いじゃないですか。』

『じゃあ、何だっけ言いたいの？』

『年収とか、仕事内容とか、趣味とか、』

『彼女いるのかとか、好みタイプとか。』

『いやー、そんな話は無かったかな？』

『年収とか気にならないんですか？』

『ならない訳じゃないけど、直接は聞きにくいでしょ？』

『だって、中学当時は何でも話せたって、』

『さっき言ってたじゃ……』

『そうだったけど、そんなダイレクトに聞けないって。』

『もう、子供じゃないんだから。』

『ふ〜ん。』

いやらしい流し目で榎村を見ながら、そう言った。

『何よ？』

少し焦り気味に たじろぐ榎村。

『ズバリ、次 会う約束したでしょ！』

『さあ？どうだったかな？』

とぼけた横顔には、隠しきれない笑みがあつた。

『あ～、やっぱり。今日の先輩、かわいい。』

『あ～、うるさい。仕事しな！』

榎村は、そう言うと、病院玄関のロックを開き、
午後からの診察に応じた。

この時、榎村は 今度会う時に
その辺を聞いてみようと思った。

午後の診察が終り、帰宅した後。

榎村は、寺井の事が気になっていた。

『あいつ、何してんだろ。

せっかく、メルアド書いてやったのに。』

その頃寺井は、鏡に向かって悪戦苦闘していた。
榎村が、寺井のギプスに書いたメルアドと
電話番号を必死に読み取ろうとしていた。

『くく、読めねえ。あのバカ(榎村)、
自分の向きに書いたって、俺には逆さになって、
読めねえじゃんか。しかも、波打ってるし。』

9時を過ぎても榎村へは、寺井からの連絡は無かった。
寺井は、10回程榎村宛のつもりで電話を掛けたが、

全て間違いだった。

そして、10時過ぎ、寺井の携帯が鳴った。

『あ、もしもし。』

『アンタ随分待たせるじゃないの。どういうつもり？』

『お前なあ、よく言うよ。俺がどれだけ苦労してるか。

お前が書いた字 読めないんだよ！』

『えっ、そうだったの？あはは、ゴメン、ゴメン。』

『ところで、この携帯番号 何で知ってるんだ？』

『はあ？ 何、寝ぼけてるのよ。』

今日、病院の受付で住所、氏名、電話番号を
自分で書いたんでしょ？それ見れば、判るじゃない。』

『おお、ナルホド。』

『アンタって、やっぱりバカね。』

『お前にゃ負けるけど。』

マイペースな天然ボケは、お互い様だろうか。
二人にとって、特に こじれるような事は無く、
親近感と安堵感を覚える二人だった。

『それで、今度の日曜日 都合はどうか？』

『うん、良いよ。どこ行く？』

『そうだな、俺未だ、ギプスが取れないから、
大人しく映画でもどうか？』

『うん、じゃ、映画情報調べとくね。』

『ああ、頼むよ。』

『どんな映画が 趣味かな？』

『ホラー以外なら、何でも良いよ。』

『じゃ、ホラーにしようか？ 今ね、
「決して一人で観ないでね」が流行ってるんだよ。』

『おお、楽しそうだな。』

じゃ、俺はシアターの外で待ってるよ。』

『情けないわねー。』

『俺がホラー苦手なの知ってて言ってるんだろ。』

『中学の時に、そうだった事は知ってたけど、
まさかこの年で……』

『大きなお世話だ。』

『ところで、ギプスが取れるまで仕事も不便だね。』

『うん、でも何とかなるさ。』

『左手が使えなくても、仕事に差し支えないの？』

『ああ、俺の仕事は電気回路の設計なんだ。

今は、パソコンのCADを使って設計するから、
右手が使えれば、なんとか仕事に支障は無いよ。』

『へえ〜。』

『車もAT車だし、運転にも 特に問題ない。』

『そっか、少し安心したよ。』

『サンキュー、じゃな、また連絡するよ。』

『うん、今度こそ、待ってるね。』

二人は、始め 懐かしさや好奇心で
相手を知ろうとしていたが、
今では、異性として相手を知りたい
と思うように変わって行った。

恋の温度差

寺井と櫻村は、日曜日に駅前で待ち合わせた。
二人は映画館に着くと、観たい映画について話を始めた。

『おっ、これはどうだ？自転車野郎、日本一周の青春』
『パス、これは？石上家の呪い、怨念がつきまとう』

『却下！とんでもない。なあ、恋愛物にしようぜ。』
『仕方ないわね。じゃ、コレ。』

『ん？アニメか。』
『うん、実は 観たかったんだ。』

『それなら、最初から そう言えば良いのに。』
『いいじゃない！』

照れ隠しに 憎まれ口を叩く櫻村を
寺井は不満無く受け入れるようになっていた。
中学の時は、これで毎日のように口喧嘩をしていたのに。

二人が観たアニメ映画は、
ピアニストを夢見る男子高校生と
それに憧れる女子高校生の恋愛ストーリーだった。
挫折を繰り返しても、
くじけない男子のひたむきさに魅かれる女子、
そして最後は、女子の支えがあって夢が叶うという
ハッピーエンドだった。

映画を観て、食事を済ませた二人は、
街を歩きながら、話をしていた。

『ねえ、寺井の夢ってある？』
『大人になった今じゃ、夢はねえ……どうだろう。』

大学受験の失敗で夢を失った寺井にとって、
夢より現実という考えに変わっていた。

しかし、寺井が夢を持っていないと気付いた檜村は、
今までとは違ってすごく寂しい顔をした。
そして下を向き、肩はがっくりと落ち、
大きな期待から崩れ落ちた様子だった。

こんな悲しい檜村を見た寺井は、
これまでに味わった事の無い罪悪感を覚えた。

『アンタ、やっぱり変わったね。』

『そうかな？』

『中学の時は、大きな夢を持ってて、それで……』

『子供の時の夢と

大人になってからの夢が違うのは当然じゃ……』

『将来の夢オリンピックのマラソンで金メダルを取る。』

それは、中学の卒業文集で書いた寺井の将来の夢だった。

『あ～、ソレな。走るより、自転車の方が面白いから、

その夢を捨てたんだけど、

今、そんなこと言われても、困るよ。』

『自転車には、夢がないの？』

『いや、あるある。』

『自転車のどこが好き？』

『自転車のロードレースには幾つか種類があるんだけど、

中でも俺が好きなのは一日100～200km走るレース。

交通規制された一般道路を走るんだけど、

平坦な道だけじゃない。クネクネ曲がり道もあれば、

急勾配のヒルクライム(坂を上る事)や

ダウンヒル(坂を下る事)もある。

そのダウンヒルが好きなんだ。

俺達のレベルで、時速60～80kmのスピードがでるんだ。

一流選手は、ダウンヒルで時速100km位出るんだぜ。』

『自転車で時速100km？嘘みたい。』

『ライバル達を下りで一気に抜き去る爽快感は最高だよ。』
『怖くないの？』

『そりゃ、怖いよ。

時速70kmで走る自転車でコケたら、どうなるか？』

『あ、こうなるんだ。』

樫村は、寺井のギプスをそっと手で触ると、
眉間にシワを寄せた。

『コケるのが怖いとスピードを落とす。

すると、後ろから他の選手が猛スピードで抜いて行く。

抜かれるのは悔しいから、他の選手とは、
意地と勇気の競い合いだ。』

『ふ～ん。ホラー映画より怖いじゃん。』

『とにかく、日本全国のレースに出て、

いろんなコースのダウンヒルを楽しみたいんだ。

自転車レースなんて、ヨーロッパの方が盛んなんだよ。

いつかドイツやフランス、オランダのコースが走れたら』

『なんだ、しっかり夢 持ってるじゃない。』

さっきまでの曇った表情から一変して、

樫村は 明るい笑顔に変わった。

『今のが 夢になるのかな？』

『うん。十分 大きな夢だと思うよ。』

この時、寺井は生まれて初めて

一人の女性の笑顔を守りたいと思った。

『あ、あのな。実を言うと、

お前の事を好きになったの これで二回目なんだ。』

『えっ！いつの間に？』

『一回目は、中学の時の校内マラソン大会で、

俺が2位になったろ？

その時、クラスメイトのお前がゴールで迎えてくれて

俺にVサインをくれたんだ。それで好きになった。』
『でも、そんな事、当時 聞いたこと無いけど。』

『伝えたかったけど、恥ずかしくて言えなかった。』
『そうだったんだ。』

『で、二回目は こないだ整形外科に行った時、
お前に再会して、Vサインを見た時かな。』
『アンタ、Vサインに弱かったの？』

『ちがーう！Vサインを出したお前の笑顔にホレたんだ。』

樫村は、これまで何度か恋愛を経験してきたが、
これ程自分を理解し気を使わずに何でも話せる男性とは、
めぐり逢わなかった。
果たして、寺井と友達以上の関係になれるだろうか？
それが、樫村の不安だった。
それ以外の事は、問題にしなかった。

『俺と 付き合ってくれないか？』
『少しだけ、考えさせて欲しいの。』

『判った。』
『じゃ、今日は ありがとう。』

二人は、別々の方向に歩きだした。

恋はダウンヒル

檜村は、寺井から告白を受けた翌日、
勤務先の病院で後輩の受付嬢と話をしていた。

『で、返事は どうするんですか？』
『う～ん、どうしようかなってところ。』

『今、彼氏いないんでしょ何か問題でもあるんですか？』
『いや、あいつに問題はなくて、私にちょっと……』

『他に好きな男がいるとか？』
『じゃなくて、踏ん切りがつかなくて……』

『で、いつまで引っ張る気ですか？』
『う～ん、いつかな……』

『って言ってる間に他の女に取られたりして。』
『そ、それは……』

『無いとは 言い切れないでしょ？
彼、良い会社に勤めてるし、スポーツマンだし、
ルックスも悪くはない、
果たして、彼の会社の女性従業員が、
いつまでも 放っておくかな～？』
『……』

告白を受けてから1週間踏ん切りがつかない檜村は、
寺井に連絡をできずにいた。
そして、日曜日の夜、檜村と寺井とで
こんなメールのやりとりがあった。

(どうだい、ギプスの調子は？)
(ギプスの中が、かゆいぜ。
2週間も風呂に入れず、シャワーだからな。)

(汗臭そう。あと、一週間でギプスは取れる。)

もう少し、頑張れ。)

(サンキュー。それより返事は、まだか??)

(もう少し、待てるかな?)

(あまり、長くは待てない。

その気が無いなら、早く振ってくれ。)

樫村は、悩んでいた。

前の恋が酷い終わり方をしたので、

少し臆病になっていた。

寺井と良い恋ができるだろうか？

それとも、友達で終わるのだろうか？

寺井にOKを出すのに問題は無い、

ただ不安だった。

(アンタ、怪我が治ったらまた自転車に乗るの?)

(もちろん。)

(自転車でコケるのが、怖くない?)

(コケるのは怖いけど、そんなの気にしてたら

自転車に乗れないよ。

樫村は、何かに怯えているようだけど、

人生も自転車レースみたいだと俺は思う。

勇気と根性で前に進むんだ。

疲れたら休めばいいし、

怖いならスピードを落とせばいい。

他人に速度を合わせる必要は無い。

自分のペースで走るんだ。)

(私、アンタと上手く やっていけるかな?)

(俺たちなら、絶対上手くいく。俺を信じてくれ。)

(私、直接会って返事をしたいから、今から会える?)

(もちろん!)

(じゃ、今から病院に来て、待ってるから。)

(よし、すぐ行く!)

榎村は、自分が勤務する病院に着くと、
ロックを開けて中に入った。
そして、いつものように受付に座り、
寺井を待ちながら、考えていた。

『恋はダウンヒルね。怖がってちゃ、できない。
一歩、地面を蹴れば 後は下り坂、
ペダルを回さなくても勝手に進む。
時には、自分でスピード制御出来ない時もある。
でも、怖いからと言ってスピードを落とせば、
誰かが先に行く。
やだ、あいつを誰かに取られるのは、絶対やだ。』

榎村が病院に着いてから10分程で、
寺井が病院の玄関ドアをゆっくりと開けた。
待合室は真っ暗で、
非常経路を示すライトだけが緑色に光っていた。
寺井は、受付に目をやると、
榎村がじっと見つめている事に気付いた。

『こんばんは、どうされましたか？』
『あの、予約をしたいんですが。』

『予約内容は、診察、治療、手術……そして、……』

榎村は、何かを言おうとしたが言葉に詰まっていた。
それを察した寺井は、
受付カウンターの前まで行き、口を開いた。

『君の人生、これからずっと独占予約したいんです。』
『……予約、承りました。』

迷いから解放された榎村は、
頬を赤く染めて笑顔のVサインを出した。
そして、カウンター越しに 二人は唇を重ねた。

寺井と榎村の恋のダウンヒルは、今始まったばかり。

そのコースは、時にはキツク時に緩くもありますが、
果てしなく 長いコースになりました。